



柴田鍊三郎

眠狂四郎無頼控

続三十話

# 眠狂四郎無頼控 続三十話

---

昭和三十四年十月二十六日 印刷  
昭和三十四年十月三十日 発行

定価 三三〇円

著者 柴田 錬三郎

発行者 佐藤 亮一

東京都新宿区矢来町七十一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七十一  
電話 東京(34) 七一一一―九  
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店でお取替え致します。

目次

青銅の顔	七
月の濡肌	一九
血汐花	三三
淡路人形	四三
悪妻責め	五五
神殿の謎	六七
飛ぶ白刃	七九
父子孤独	九一

くれない鏡	一〇
芳香異変	一一
髑髏屋敷	一二
花の人語鳥	一三
仮象記	一四
快樂寺	一五
絶望刀	一六
闇にいる男	一七
裸女屋敷	一八
武士道異聞	一九

忠義父子	三三
狐行列	三五
夜盗橋	三七
ねずみ誕生	三五
さかだち供養	三七
もののふ帖	三三
狂い部屋	三五
尼寺春情譜	三七
恋慕幽霊	三九
鷹と鶴	三一

単小僧御用……………三四

白い闇の決闘……………三五

装幀 中尾 進

眠狂四郎無頼控

続三十話





青銅の顔

早春——。

ほうほうたる武蔵野の枯野を、遠くから分けて、渡つて来る風は、もうすぐ、雨を乗せて来るであろう。げんに、北方の丘陵は、濡れて、烟っているようであつた。

鎌倉古街道、という。

首は鎌倉から、武蔵野の中央部を貫いて、西上州および信越地方を尾として、往昔これが、武蔵七党武士の馬蹄で、高く鳴つた。

いまは、旅人の姿は、ことごとく東海道へ移つて、一里塚の大きな二本榎も、いたずらに、高いばかりの、蕭々たる原野の眺めであつた。

夜明けてから、わずかに、数人の農夫を通したばかりの路上に、やがて、黒羽三重を着流した肩のとがった瘦軀が、しずかな歩みを刻んで、近づいて来た。

飄然と江戸を去って一年——いま、また、飄然として帰つて来た眠狂四郎が、東海道を逸れて、この鎌倉古街道をえらんだのは、いかにも、この虚無の男にふ

さわしい、といえる。

崩れて行く空へむかつて、足をはこぶのである。

鋭く鳴つて打つて来る寒風に、そうでなくてさえ血の色に乏しい貌が、一層蒼く沈んで、暗い。

先刻すれちがった農夫が、怯えて、道をさけたが、わが家へ戻つて、枯野から生れた幽鬼と出遭うたと、家族に告げても、さまでの誇張にはなるまい。

鶴見川に沿うた地点で、十日市場からつづく溪間を通り抜け——緩い傾斜の、いつの間にか丘陵を辿っているのであつた。

疎林が、きれたり、またつづいたりして、あたりに人家は、さらに見当らなかつた。

——ふと。

狂四郎は、双手を懷中に置いたまま、左方の灌木の繁みへ、目を投じた。

人の気配が、そこにあつたのである。

とたんに、ざわつと動いて、ひよいと、のぞけた首が、若い女のものであつたのは、意外であつた。

綺麗だったのである。

かたちのいい眉を迫らせた大きな双眸も、やや反つて高い鼻梁も、それから肌膚の白さも、きわだつて遠目のきく特長だつた。

一瞬、まばたきもせず、狂四郎を瞋めた娘は、ぼちつと音たてるように、長い睫毛を打たせてから、「失礼ですよ！」

と、鋭く咎めた。

「なんとした？」

怪訝に、問いかえずと、こたえは、はっきりしたものであった。

「小用を足していたのじゃありませんか」

「そうか」

狂四郎は、苦笑して、歩き出した。

すると、娘は、

「あ——似ている！」

と、叫ぶや、大急ぎで、灌木をかきわけて、道へ出ると、小走りに追いついて来た。

かまわず、歩幅を広く取って、ものの一町も進んだ狂四郎は、かたわらにより添うて離れぬのみか、食い入るように、こちらの横顔を瞞めつつける娘に、わずらわしさをおぼえて、

「おれが、だれに似ているのだ？」

前方へ目を投じたままで、訊ねた。

ところが、娘は、口をつぐんで、何ともこたえぬ。

狂四郎は、視線をまわした。

縹色の道行台羽をまとうた旅姿であったが、手に荷物は何も持っていなかった。

「狐狸に馴れた百姓が、おれを見て怯えたが、お前は、怖くないのか？」

娘は、かぶりをふって、「怖くなんか——似ているんですもの！」

と、眸子をかがやかせて、云った。

「……」

狂四郎は、——誰に？ と重ねて問う代りに、もとの姿勢にもどると、

「おれに跟いて来るのなら、顔をまっすぐに置くがよい」と、冷たく命じた。

「はい——」

すなおにしたがった娘は、

「おきむらいさんは、江戸へお行きになるのですか？」

「うむ——」

「じゃ、江戸までお伴させて頂けますでしょうか？」

「勝手にすることだ」

「ありがとうございます」

札をのべて、両手を胸に置くと、小さく、「よかったです！」と咬いたが、そのはずんだ声音は、狂四郎の耳

に、心地よくひびいた。

## 二、

「あ——あれ、鶴が飛んでいる！」

狂四郎のあとにしたがって、四、五歩あるいた時、娘は、頓狂な高い声をあげて指さした。

雨に追われて、鉛色の厚い層雲すれすれに、白いゆたかな翼に速力をしめして翔け過ぎて行く三羽のすがたを仰いで、狂四郎は、江戸へ帰って来た感激を、はじめて胸中に湧かせた。

当時——。

田舎の人々が江戸土産に持ち帰る錦絵には、かならず上空を鶴が舞うところを描いてあった。公儀は、「餌まき」という者を、江戸近郊に置いて、鶴の下りるように、その餌を撒かしたのである。將軍が鷹狩に出て、鶴を捕えれば、これを朝廷に献上するしきたりがあるためであった。

江戸を去る者、江戸へ帰って来る者が、市中をはなれた野で、空に鶴のすがたを仰ぐ——美しい風景が、この時代のものであったのである。

娘は、ひとり明るく微笑し乍ら、仰がせた顔をまわして、その行方を見送っておいて、何思ったか、ツツ

ツ……と三歩ばかり走り出ると、両の袖を、びんと張って、しなやかに、首をひとり振ってから、右足を、とんとふみ出した。

かたちがきまつて、後姿が、なまめいたところで、長唄を口ずさみつつ、踊りはじめた。

「……頃は寿永の白拍子祇王祇女とてふたりあり、雲井の縫のうしろ帯……男舞いとも名づけたり」

狂四郎は、そのさす手ひく手裾さばきに、血の出るほど叩かれた習練のみごときを見た。

「……君を初めて見る時は、千代を経ぬべし姫小松……御前の池に亀浮び、鶴も群れいて千歳経る、羽袖をかざすしおらしや、響く扇のとりどりに、三度び返してかなでける——」

くるりと体がまわった時、白いおもてには、真剣そのものの気色が刷<sup>は</sup>かれていた。

武蔵野の原頭を舞台にして、いちぶの隙もみせず、鮮やかに踊ってみせる天衣無縫ぶりが、この虚無の男の心をなごませたとすれば、娘にそれをなさしめた鶴は、やはり、騎<sup>ま</sup>って揚州に上るに足りる瑞祥の生きものといえようか。

雨は、この時、今白拍子の上へ落ちて来た。

恰度、時刻を同じくして、この丘陵から溪間へ移る葉研形の坂路の中ほどの、杉木立に、あきらかに、何者かの来るのを待ち伏せる険しい気配の数騎がいた。

いずれも、野駆けのいでたちであつた。陣笠の紋が、揃つて五三桐であることと、指揮者とわかる年配の武士の跨つた鞍の前立てに、丸に卍の紋がついているところから見て、これは、疑いもなく阿波藩蜂須賀家の定府の士たちであつた。

「おそいな！」

指揮者は、気短かな人柄らしく、眉根を寄せて、他の者たちへ当るような語気で云つた。

「時刻は、はかつて居りますが——」

一人が、こたえると、

「いや、もし、田所が、この街道を通らなかつたら、という懸念だ」

と、吐き出すように、焦躁をかくさなかつた。

「それは、まちがいございませぬ。田所の妻を拷問にかけて白状させて居ります」

「それはもう、何度もきいた。……肝要は、田所が、はたして来るか、来ないかだ！」

その激しい声がおわるかおわらぬうちに、  
「きこえる！」

一人の口から、ほとばしつた。

皆は、はつとなつて、耳をすました。

たしかに——馬蹄の音が、はるかに遠方に起るのを、風がつつたえて来た。

この坂路を下れば、田野がひらけ、馬入が通じている。馬入とは、馬を入れることの出来る程の幅を有する畦畔である。馬蹄は、そのまた先の鶴見川沿いの地点を鳴らしているようであつた。

雨が降つて来て、樹枝をさわめかせて、そのひびきを消すや、指揮者は、舌うちして、憎いものに空を仰いだ。

「矢の橋を渡りました」

そう告げたのは、馬上の者ではなく、後方にひかえていた唯一人の徒士であつた。どこといつて特長のない、風采のあがらぬ男であつた。しいて、特長をさげせば、脂肪過多の膨れた目蓋を、髯陶しげに眸子へ垂らしていることだったが、それが、かえつて、貌を貧しいものに見せているといえなくもなかつた。服装も粗末で、鼠色の無地の木綿羽織には、紋もついていなかった。無紋は、最も身分のひくいお小人を意味している。裾をからげて、素足に雪駄をはいていた。

しかし、このお小人が、ただの軽輩でない証拠は、その腰に帯びた長い太刀であつた。小兵のからだにあ

まる、といった程度の長さではなかった。四尺を越えていたのである。これを使いこなすとすれば、余程の抜刀術に長けていなければならぬ。

抜刀術は、長い太刀を抜くことより起って、戦場における用途であった。起源は明らかにしないが、文禄・慶長の朝鮮役の修羅場裡に、抜き討つ退業の利が、攻防の形勢を変えるまでに働いたため、以来重く考えられるようになった、という。鮮人や明兵は、肩に斜に剣を負うて、左手で劍鞘を摺り上げつつ、抜き撃ちに斬り下す兵法をとったが、その間髪をはずさず、日本武士が腰間から走らせる紫電は、能く彼らの臂を断った。この兵法は戦場にあつて、持った槍を折られた場合、一瞬を待たずして手に剣光を煌かせて、敵の乗する間隙を与えないために、生まれたものであった。加藤清正は、これを学んで抜群の腕前を有し、朝鮮の山野を奔馳しつつ、二百余名を一撃によつて仆した、とつたえられている。

時代が下るにしたがつて、研磨の功を重ねて、抜刀術は、鞘離れの刹那に勝負を決するものになり、陰陽の変化は、鯉口を切るところに生じ、敢えて長刀に限らず、となつた。したがつて、当代に於ける斯道の流派中、長刀を帯びている者は、殆ど見当らなかつ

た。ただ、居合抜きと唱えて、この退業を行なつて、業を售る大道技芸者はいたが、これは敵を斬る勝負の業とは自ら別ものとして扱わねばならぬであろう。

したがつて――。

四尺余の長刀を腰に帯びていることは、非常に珍しい姿といわなければならなかつた。まして、居合の流派を起している師範ではなく、武士の資格もあるかなきかのお小人が、である。

この男の腕前が、いかに高く買われているかは、指揮者の次の言葉で、明らかであつた。

矢の橋を渡つた、と告げるのへ、頭をまわして、

「よいか、甚内。田所は、お前を見たならば、遁れ得ぬとさつて、お墨付を、路傍へすてるかも知れぬ。目は、それにもくばつておけ」

「心得て居ります」

甚内と呼ばれた男は、樹枝からしたたる平に垂れ目蓋をしばたいたが、いかにも、もつさりした表情で、これが異常の秘技を備えた人物とは到底見えない。

馬入をいっさんにとぼして来る馬蹄の音は、みるみる、近いものに迫つて来て指揮者自身もはや、緊張のために、口をきこうとしなかつた。

因許へ向つて帰路を急ぐ田所等も必死ならば、これ

をはばもうとする藩士たちも必死だった。阿波二十五万石の浮沈が、田所の懐中にある封緘の一笔にかかっている、といつて過言ではなかったからである。

……坂にさしかかったぞ！

全神経を耳に察めていた一同は、緊張をさらに鋭いものにした。

と——。

どうしたのか、馬蹄の音が、ふっと、かき消えた。

はっとなっていると、数秒を置いて、再びひびいて来たその音は、意外にも、遠ざかっているではないか。

「引返すぞ！ 感づいたか！」

思わず、指揮者が、血相変えて口走るや、それへかぶせるように、甚内が、おちついた声音で云った。

「引返したのではありませぬ。袖徑をえらびました」「なにっ？」

一齊にあびせられた視線を、甚内は、まぶしげに、しきりにまばたきつつ、

「この丘陵の地形を見て、伏兵があるかも知れぬ、と田所殿は用心されたに相違ありません。袖徑をえらんで、むこうの麓をまわる所存かと察しられます」

密使にえらばれるだけあって、田所は腕も立つと同時は、機敏に頭腦の働く人物であつた。ここまで馬を

とばして来るあいだに、待伏せられそうな個所は、つとめて躲して来たに相違ない。

「甚内！ 追えっ！……追いついて斬れっ！」

指揮者の叫びがおわらぬうちに、甚内は、風のように、杉木立から、奔り出て街道をつききるや、近頃代採されたばかりの丘陵の頂上へ、馳せのほり、そして、かき消えた。

### 三

偶然のことであつた。丘陵の北面の急傾斜した叢中を、けものが疾駆するに似て、いっさんに降りて行く甚内の姿を、眠狂四郎が、胡桃林の浅い溪をへだてた向いの丘陵の中腹に建つ阿弥陀堂から、目撃していた。

雨を避けて、この堂の庇の下に、娘とともに身を入れた直後であつた。

娘が、お吉といい、江戸興行にやつて来た淡路人形一座の者であることを、問わず語りにきかせるのに、あい槌もうたずに、庇から縄で垂らした雨乞いの田螺から、つうつ、つうつ、と糸を引いて落ちる雨だれへ、送るともない冷たい眼眸を送っていた狂四郎は、ふと、その雨だれと雨だれの間隙を——彼方の叢中を掠める一個の連影をみとめて、急に、目ざめたように、



神経を働かせたのである。

——ただの脚力ではないが……。

「……いっぺんでいいから、あやつり師をさせてくれ  
て、わたしが、どんなにたのんでも、親方は、きい  
てくれないんですもの——とうとう、小田原で、大喧  
嘩になって、出てうせる、だれがいてやるもんか、こ  
のあまつ、このくそじい——」

お吉は、狂四郎がきいていようがまいが、かまわ  
ずに、しゃべりつづけている。

速影から目を離さなくなった狂四郎の耳には、もう  
そのおしゃべりはとどいていなかった。

麓の林の中から、矢のように馳せ出て来た一騎がみ  
とめられ、速影が、それへ向つて躍るのどと見てとつ  
た狂四郎は、雨の幕の中に展開されるその光景を、ふ  
つと、江戸へ帰つて来たおのれの運命にむすびつける  
予感をもった。

之を毫釐に先すれば差うに千里を以てす。

あるいはまた、

初め有らざるもの靡し、克く終り有るもの鮮し。

運命というものの終始に就いて、この男が、無頼の  
行状を重ねるうちに、いつとなく知ったことは、これ  
らの言葉が含む残酷であった。そして残酷と知るが故

に、この男は、おのれの刹那の予感を、重く量る生き  
かたをえらんている——。

なんの関わりもない他人が起す一場の争闘も、冷た  
い眸子に映した一瞬裡に、これが、直感的に心に掛け  
られる比重は千差である。悟りとはおのずから別の意  
識であった。

狂四郎は、えじきを狙つて翔け下る猛禽にも比せら  
れる疾駆の黒影を目で追いつつ、勝利がはずれにある  
かをはやくも読みとった。

騎馬の者が、これを迎え撃つべく、白刃を抜きはな  
つたからである。

襲つて行く者の腰に、おそろしい長さの太刀があるか  
らには、居合の迅業を使うに相違なく、これを迎え撃つ  
に、距離を置いて抜刀するのは、狼狽した証拠である。

居合の極意は、敵に抜かせておいて、おのが身をそ  
の刃圈内に容れつつも抜かず、斬りつけて来た白刃を、  
柄で受けとめ、第二撃のために敵が振りかぶつたとこ  
ろを、目にもとまらぬ抜き討ちに、その胴を薙ぐ——い  
わば、鞘のうちにおいて既に勝ちを含むものである。  
この襲撃に備える正剣の業は、あくまで没我のおち  
つきをもってなさねばならぬ。

騎馬の者は、当然予測していたであらうに、咄嗟の